



発行 浄土真宗本願寺派 稱讃寺

〒二二一〇〇七五

東京都足立区一ツ家三丁目五番二〇号

TEL 〇三―五二四二―二〇二五

FAX 〇三―五二四二―二〇二六

HP shousanji.com

二〇二二年度 稱讃寺門信徒会費

年会費 六千円

振込先 城北信用金庫 一ツ家支店

名義 浄土真宗本願寺派 稱讃寺教会

代表 北村 信也

口座 普通 6176051

（いよくあくせ）

五濁悪世のわれらこそ

こんごう しんじん

金剛の信心ばかりにて

しょうじ

ながく生死をすてはてて

じねん じょうど

自然の浄土にいたるなれ

（高僧和讃 善導讃より）

このご和讃を川瀬和敬師は『浄土高僧和讃講話』の中で、「五濁悪世に生を受けたわれらとしてほどのような道があるか、ただ一つ恵まれた金剛堅固の信心ばかりによりかかって、永劫に生死流転のきずなを断ち切って、弥陀の誓願に報うて現れた無為自然の浄土に生まれるほかないのです。」と意識されておられます。

私は、「私たちは、阿弥陀さまから頂いたご信心だけによって（ご信心を獲れば）、永久に



生死の苦しみがなくなり、この身が滅んだら、（または、この世で）自ずと、自然なる阿弥陀さまのお浄土に生まれる」としか捉えておりませんでした。

「ながく生死をすてはてて」とか次のご和讃の「ながく生死をへだてける」とあり、「生死」とは「生死苦海」「生死流転」「罪惡生死の凡夫」と言われるように、「苦」「迷い」「罪惡」そのものであり、「人生」と捉えていました。

しかし、川瀬師は「祖聖（親鸞聖人）が、生死出ずべき道の追究であったことが知られます。生死を超越することは自己の実存に関わることで、山の二十年の歳月による形式的表彰をもって代えることができないと、自認されたところが、名利を下に見おろす大きさであったと思います。生死が超えられないと自知された所に、すでに涅槃が呼んでいたのでしょう。」と述べておられます。

「生死」とは「自己の実存」に関わることで知り、「苦」「迷い」「罪惡」「人生」と思っていた私は、どこか自分を抜きにして客観的に「生死」を捉えていたと思います。

# 秋季彼岸会法要のご案内

日時 九月二十五日（日）午後二時

講師 赤松 秀敏 先生

（東京都済生会病院医師）

講題 家族の悲歎ケア



安達さん、高橋さん、中木原さん、早崎さん、  
佐藤さん・佐藤さんの息子さんご夫妻  
法要後、川田原さん がご参拝くださいました。

今回は、緩和ケアに携わっておられる医師でもあられ、僧侶でもあられる赤松秀敏先生に「家族の悲歎ケア」ということで、

死に逝く家族への思い（悲歎）・亡くなったからの思い（悲歎）とそれらの人に接する者としての姿勢（ケアの在り方）等々をお話くださいました。

その中で、遺族に対して周囲の者はどう言葉掛けするか、クイズがありました。

言葉かけの内容は、

- ① 大変でしたね。
  - ② どんな経過で？
  - ③ 気づかなかったの？
  - ④ 元気で。
  - ⑤ でも、これで・・・
  - ⑥ 仕方なかった
  - ⑦ 時間が解決してくれる
- で、①以外はNGだそうです。六七%の方が聴いて「辛い」と回答されているそうです。

また、よくかけがちな言葉として

「聴くことしかできないけれど・・・」とか、「なんでも言つてよ」と親しく言われても、「あなたに話して何がわかるの？」「何をしてくれるの？何をしても良かったらいいの？」と困ってしまい、逆効果だそうです。

そして、「回復へのアドバイス」や「がんの詮索」は決して役に立たない言葉かけであり、具体的には「元氣そうで安心したわ」「いつまでも悲しまないで」「あなたの気持ちにはよくわかります」「寿命だったのよ」等です。逆に、肯定的なものであれ

ば、悲歎も和らぐそうで、「よくがんばりましたよね」と話すことで、癒やされるということです。

また、「人生会議」「意志決定」「予告告知」等々お話をくださいました。

「治すことは時々しかできないが 和らげることはしばしばでき 癒やすことならいつでもできる」（アンブロワーズ・パレ）の言葉も引用されました。（これは、人としての極致でしょう）

「御仏に抱かれて きみ往きぬ 慈悲の国 み救いを身に掛けて 示します 畏さよ」

「死に逝く方」は、その身をもって、仏さまに成らせて頂く（すくい）を私たちに教えてくださっておられるのでしょうか。

念仏往生は、「来世（未来）往生」か「現世（今）往生」かの議論があります

が、お念仏申す生活には「必ず仏にします」のご本願が心のどこかに留まっている証であり、きつとそれが、阿弥陀さまのスピリチュアルケアなのではないかなあと思います。（私は未来往生とと思っています。）



# 現世利益和讃について

## 十一首

てんじん じぎ

天神・地祇はことごとく

ぜんきじん

善鬼神となづけたり

ぜんじん

これらの善神みなともに

ねんぶつ

念仏のひとをまもるなり

### 【天神と地祇】

天神とは「天津神（あまつかみ）」のことで高天原（たかまがはら）におられる神のことである。天照大神、建速須佐之男命（たけはやすさのおのみこと）など。地祇とは「国津神（くにつかみ）」のことで地神、すなわち、天孫降臨以前から日本の国土に住み、その土地を守護する神のことである。日本神話の神では大物主神（おおものぬしのかみ）、猿田彦神（さるたひこのかみ）などがある。

仏教では、帝釈天、梵天、四天王、夜叉なども天神とされる。地祇には、堅牢地祇や八大竜王などの鬼神をいう。

※「ことばの散歩道」「Imidas」参照

これまで述べてきた、梵天や四天王などの天の神、堅牢地祇や竜神などの地の神をまとめて、「天神・地祇」と言われています。これらの神々はどれも善鬼神であり、念仏の人を護ってくださるのだと総括しておられるのです。お念仏の人は、宇宙の中にあるあらゆるものによって護られているという、親鸞聖人の仰せを信じるのが大切です。自分中心の小さな我見にしがみついても、よもやそんなことはあるまい、やはりお金がないとだめだなどと言っていたら、いつまで経っても不安なままの人生です。人間は、本当のことを教えてくださる仏の教えに出遇っていても、つい我を張ってしまいがちです。阿弥陀さまが心配ないとおっしゃっているのに、それでもやはり心配だと我を張るのです。

私たち凡夫の心の中には、抜きがたくこの我というものがあります。どんなに大人しい人でも、我はあるのです。むしろ大人しい人の我は引つ込むから、なかなか折れないのです。でんでん虫の角をついたら、折れずに引つ込むでしょう。雨が降ったらまた出てくるのです。あれは私たちの我のようなものです。引つ込んだと思ったら、また出て来ます。どこまで行っても、阿弥陀さまの仰せを素直に聞かせません。

龍樹菩薩がある地域に伝道に行ったところ、そこの人々がなかなか仏教を受け入れなかったことがあります。そこで龍樹菩薩は、皆さんが仏教を信じられないのは学問や教養がないからではなく、皆さんの中に自分は何も知らないという謙虚な気持ちがないからだ、と教えられたそうです。知らないのを知っているという気持ちがあるから、あなた方は仏教がわからない。

つまり邪見驕慢というものが、仏教に入れない歳代の理由だということを説いたのです。阿弥陀さまの本願がわからないのは、私たちに能力が足りないためではありません。自分は何でもよく知っていると思う我ががあるからなのです。ソクラテスも、自分は何も知らないと知ることが真理に入る唯一の門だという、「無知の知」の大切さを説いています。

お聴聞を勧めてモ、まだ阿弥陀さまのお世話にならなくても良いと言ったりする人がいます。「まだまだ体も達者で若いから大丈夫だ」と言う人もいます。「今は忙しいので、そのうちに参ります」と言って、三十年経っても同じままの人もあります。そういう人は、自分が無知であることを知らないのです。知らないのを知っていると思っているのです。

よこしまけんきょうまんぐしゆじょう

邪見驕慢悪衆生

しんぎょうじゆじんになん  
信樂受持甚以難

なんちゆうしなんむかし  
難中之難無過斯

（邪見・驕慢の悪衆生、信樂受持すること  
はなはだもって難し 難のなかの難これ  
に過ぎたるはなし。

「正信偈」『註釈版聖典』二〇四頁

と「正信偈」の言葉を唱えてはいても、これが自分のことだとはなかなか思えません。

親鸞聖人のお弟子の一人であった明法房は、もと山伏弁円と名乗って聖人を殺そうとした修行者です。初めは板敷山を通られる聖人を襲おうとして失敗したので、とうとう稲田の草庵に直接乗り込みました。この人などは、よほど私の強い人だったのでしょうね。自分の仏法が正

しくて、親鸞聖人の仏法は間違いだ和本当に思っていたのです。どちらでも良いといういい加減な人ではなくて、真面目な、ストレートな人だったのだと思います。そして聖人と対決するつもりで草庵に行ったら、すっとお出ましになった聖人の自然な姿を見て、弓矢を折り刀を捨ててお弟子になった、と言われています。親鸞聖人よりも明法房の方が先に往生しましたので、聖人は、そのことを建長四（一二五二）年二月二十四日付のお手紙に、次のように書いておられます。

明法御房の往生のこと、おどろきまうすべきにはあらねども、かへすがへすうれしく候ふ。

（『註釈版聖典』七三七〜七三八頁）

これは明法房の劇的な転換の出来事です。阿弥陀さまの本願の無我の前に、弁円の我は根底から折れたのです。

助かるというのは、自分のいろいろな煩惱がなくなるのではなく、この我が折れるという出来事です。煩惱は、生きている限りなくなることはありません。皆さんは一日に三回、ご飯を食べるでしょう。私もそうです。欲望は後から出て来て、きりのないものです。死ぬまで死にたくないのです。しかし、その死にたくない私を助けるという阿弥陀さまの言葉を信じるだけで、私たちは仏になるのです。本願を信じたということは、我なくなっただけのことです。煩惱はあっても、我はないのです。ここはとても大事なところですよ。阿弥陀さまがそのままで助けようとおっしゃっているのに、それで

もこんなに煩惱があつたら無理ではないかというのは、我を張っていることに他なりません。阿弥陀さまは、煩惱がなくなつたら助けようと言っておられるのではなく、煩惱を持ったまままで助けるとおっしゃるのです。だから、この言葉を信じた人は、信じるだけで仏になることが定まります。地獄に行くしかない私が、そのまま阿弥陀さまにしていただけなのが浄土真宗です。私たちは、毎日愛欲に焼かれて、喧嘩をしたりやきもちを妬いたり愚痴をこぼしたり、地獄に行くような生き方しかできません。世の中のことを心配しているように見えても、心の底から心配しているとは限らないのです。テレビで災害のニュースを見ながら、旨いとか不味いとか言っています。私も含めて人間は白状なものです。自分のことが一番大事で、他人のことは余裕のある時や話題になつていいる時は気になつていても、忘れるのも早い。それがわれわれ凡夫というもののもので、この根性は死ぬまで治りません。

そんなわれわれが地獄に行くのは簡単です。放っておいたら、そのままが地獄だからです。源信和尚が地獄はこの地面の底にあると言っておられるのは、楽に行ける世界だという意味でしょう。地獄はこの世と地獄きなのです。ところが、お浄土はそうではありません。往こうと思つて往ける所ではなく、阿弥陀さまのお力によらなければ決して往けない超越の世界なのです。

『生命環流 浄土和讃を読む下』

大峯 顕氏著

親鸞聖人は、お手紙の中で、息子の善鸞が、

父親鸞が私善鸞一人だけに教えを説いたと言いつらしていることに対して、次のように仰つておられます。

また夜も昼も慈信（善鸞）一人に、人にはかくして法文をしへたることはせず。もしこのこと、慈信に申しながら、そらごとをも申しかくして、人にもしらせずしてをしへたることはば、三宝を本として三界の諸天善神・四海の竜神八部・閻魔王界の神祇冥道の罰を、親鸞が身にことごとくかぶり候ふべし。

『親鸞聖人御消息 八』より  
私たちは、よく相手に偽りや隠し事がないことを分かつてもらうために、「天地神明（天神地祇）に誓つて」という言葉を使いがちです。また、嘘をつくとき、閻魔さんに舌を抜かれるとも昔から言われております。親鸞聖人は、「仏さま（阿弥陀さま）に誓つて」とは言わずに、「自分が偽りを申しているなら、神のどんな罰も受ける」とおっしゃっている。「神祇不拝」の親鸞聖人が「天神地祇」を意識しておられるのかと思つてしまいましたが、罰を与える神さまは全て、「三宝を本として」とありますから、仏法を護持する、念仏者を護持する神々のことです。

よく「天罰」「神罰」と表現しますが、「仏罰」とは言いません。仏教では、五逆・十惡、謗法しても、仏さまは誰にも罰はお与えにならないからです。

「ちかいのことば」「私たちのちかい」を唱和しますが、自身の心に問い続けるものなのでしようね。仏さまからの罰を怖れて、助かるようお願いするものではないのだと思います。

親鸞聖人御誕生八五〇年  
立教開宗八〇〇年

## 慶讃法要 企画

# 親鸞聖人を知ろう

①西念寺の境内に親鸞と山伏弁円とのゆかりを示す遺品があります。今は切り株だけになってしまった桜の木です。もとは「弁円懺悔の桜」と呼ばれていました。『親鸞伝絵』によれば、弁円は稲田草庵に親鸞を襲い、逆に帰服したとあります。桜はその時の記念というわけです。



親鸞に帰服した時、弁円は次のような和歌を詠んで気持ち表現したといわれます。

山も山 道も  
昔に かはらねど  
かはりはて  
たる わがこころ  
かな

「昨日まで見ていたあの山は今日見ても変わっていない。また昨日まで見ていたこの道親鸞と弁円です。第三は親鸞と箱根権現訪も今日見ても変わっていない。で」として親鸞が布教したかということ述べ

も、私の心は親鸞聖人に会ってほんとうにかわってしまった。そのためだろう、見慣れた山や道も変わったように見えるのです」。

この話を伝え聞いた笠間時朝という武将は大変感激したそうです。そして稲田草庵の庭、弁円が帰服した所に一本の桜の木を鬼神して植えました。それが本当のことなのかどうか。それは分かりません。でも切り株は弁円の帰服を示す象徴ということの意味があるというべきでしょう。

私は今年六月に『親鸞聖人と山伏弁円と板敷山』という本を出版しました。その出版に至る従来の弁円伝に対する疑問を軸に、以下述べたいと思います。

なお、笠間時朝は親鸞を稲田に招いた宇都宮頼綱の甥です。系図で示すと次のようになります。

宇都宮頼綱

塩谷朝業 — 笠間時朝（笠間郡の領主）

稲田頼重

（稲田郷の領主—西念寺の伝）

②『親鸞伝絵』には、親鸞の四二歳から一八年間の関東の生活を三つの挿話で示してあります。第一は親鸞と稲田です。第二は親鸞と弁円です。第三は親鸞と箱根権現訪問です。このうち、第一は、どこを根拠地として親鸞が布教したかということ述べ

ています。そしてその活動が成功したことも述べています。第二は、関東には親鸞に抵抗した者もいたけれども、結局は帰服した例として弁円が取り上げられています。

第三は、権現云々より、箱根権現の支配者が親鸞と親しい聖覚法印という人物であったから取り上げた挿話と言えそうです。（『親鸞聖人と箱根権現』「歴史を知り、親鸞を知る」自照社出版2016年）

弁円については、江戸時代の二十四輩順拝記等からひんぱんに取り上げられるようになります。それが江戸時代・明治時代・大正時代が進むごとに、弁円はより悪い人間として表現されていくのです。これは枕石の日野左衛門と同じです。左衛門はそんなに悪い人間ではなかったのに、どんどん悪い人間として表現されるようになって現代に至っています。そのトドメは倉田百三の小説『出家とその弟子』でした。左衛門にとってこの小説はいい迷惑です。

③山伏弁円は、外の世界から入ってきて人氣を博している親鸞を憎み、ついには殺害しようとしています。その目的で稲田草庵から九キロほど南にある板敷山に何日も籠りました。板敷山は稲田から南方の常陸国府・鹿島神宮方面への通り道でした。当時、街道や幹線道路は山の尾根や山腹にありまして、板敷山はとても低い山なので街道に使うにはちょうどよかったのです。

板敷山はとても低いので、普通の地図には山として記されていません。何も書いてありません。しかししたしかに『親鸞伝絵』には「板敷山といふ深山」と書いてあります。覚如がそのように書きました。

親鸞の遺跡参拝の皆様に、「板敷山に登りましょう」とお誘いすると、皆さん一様「え？」と尻込みされます。「深山」ですから、どんなに高い山かと思っておられたからでしょう。でも「大丈夫ですか？ではせつかくですから」と、全員が登られます。板敷山の頂上まで登ると、「こんなに低い山だったのですか」と拍子抜けされ、また逆に「ここがああ弁円ゆかりの所ですか」と感動深く思われるようです。頂上はちよつとした平地になっていて、そこには「山伏弁円護摩壇跡」や記念の石碑が建っています。周囲にはうっそうとした木々が茂っていますので、「深山」の趣がな

いわけではありません。また「山伏弁円護摩壇跡」の前を通って、かつての街道の名残があります。その道を東の方に進むと、険しい崖を下るようになり（ほんの短い距離です）、下って右折すると現代の県道に出ることができ、それを左折して進むと、大覚寺の大きな縦長の看板が左側に立っている所に至ります。

ところでおそらく覚如は板敷山に登ったことはなかったでしょう。前述のように板敷山は決して「深山」ではありません。覚如はともすばらしい親鸞の伝記『親鸞伝絵』を書きました。伝記執筆の能力はすばらしいものがあります。

す。でも執筆当時、覚如は数え二六歳です。ですから伝記執筆に当たったの史料調査不足、親鸞ゆかりの地で訪ねていない所もあったのでしょう。やむを得ません。ここで覚如を批判するつもりはありません。後世の私たちが足りない部分を補うべきだろうと思うばかりです。

弁円は板敷山に籠もって親鸞が通りかかるのを何日も待ちました。『親鸞伝絵』の街頭する部分の絵には、弁円の手下らしい者も複数描かれています。弁円ゆかりの大覚寺（石岡市大増）の伝えでは、弁円には三十五人の配下の山伏がいたそうです。

④ここで私の疑問は、弁円はなぜ稲田草庵を襲わなかったのかということです。弁円の本拠地は、現在の茨城県常陸大宮市東野の檜原谷という所でした。そこにあった法徳院が弁円の寺です。そこから南、正確には南南西の方向三九キロの位置に板敷山があります。山伝いに行けます。高い山々の連続ではないし、まして山伏なら楽に行けたでしょう。

ところが、なんとその南南西の方向三〇キロほど行った所に稲田草庵があるのです。親鸞を殺害したいのなら、わざわざ草庵を九キロも超えて板敷山で待ち伏せなどせず、稲田草庵を襲えばいいではありませんか。弁円はなぜそのように稲田草庵を襲わなかったのでしょうか？

⑤何日待ち伏せを続けても、親鸞に出会えない弁円。「おかしい。では稲田草庵へ行ってみよう」。なに、それなら最初から稲田草庵を襲えばいいのです。それに板敷山でどうしても出会えない。手下を稲田草庵付近に送り込んで、親

鸞が草庵を出たところを確認すればいいのです。板敷山まで九キロ、親鸞の後をつけさせればいいではありませんか。

⑥しかし結局、稲田草庵を訪れた弁円。凶暴な山伏？の訪れに対し、親鸞はどうしたか。この時、親鸞は草庵に在家中でした。弁円は手下の山伏を使って親鸞が在宅かどうか調べさせたのでしょうか。

怒って顔を出すか。これらの予測はすべてはずれました。『親鸞伝絵』に、親鸞は、「左右なく出会ひたまひにけり」とあります。「すつと出て来られた」のです。それを見た弁円は間隙し、たちまち親鸞に帰服したと『親鸞伝絵』は伝えていきます。これはどういうことでしょうか。いくつかの解説書には、「親鸞は何のわだかまりもなく」と現代語訳してあります。しかし私に言わせれば、この現代語訳では「左右なく」の極めて重要な意味が分からないだろうと思うのです。

連載の本稿では、拙著『親鸞聖人と山伏弁円と板敷山』の内容紹介にとどめました。読者の皆様なら前述した重要な点についての回答をどのようにお考えになるでしょうか。

私の考え方の基本は、弁円を悪者にし、「彼みたいにはならない」として済ませてきた私たち自身の心を見直そうというところにあります。



板敷山

# 親鸞聖人御誕生850年・立教開宗800年慶讃法要 稱讃寺団体参拝 宿泊 予約しました！ (参拝日時) 2023年4月24日(月) 午前10時

## オリエンタルホテル京都六条 (宿泊日) 2023年4月23日(日)



ロビー

朝食会場



お部屋(タイプ:  
スタンダードツイン)  
お一人一泊朝食付き  
7,900円



住所

京都府京都市下京区油小路通六条上るト味金仏町181番

## 稱讃寺 行事予定

二〇二二年 一〇月の行事予定



六日(木) のんのん法話会 一四時

一六日(日) のんのん法話会 一四時

二六日(水) のんのん法話会 一四時

※申し訳ありませんが、

一〇月二七日(木) 一三一日(月) まで、鹿児島・稱讃寺永代経のお手伝いで、留守いたします。

※十一月十一日から十六日まで、

築地本願寺では親鸞聖人報恩講がおつとまりになります。次号にてご案内いたします。

あて めせん

相手の目線で見ると

ちよ せかい

遠く世界がみえてくる

二〇二二年「心のともしび」一〇月カレンダーより

## 「ウクライナ緊急支援募金」募集について

本願寺派では、ロシアの軍事侵攻により避難生活を余儀なくされているウクライナの人々を支援することを目的に、緊急に「たすけあい運動募金」において標記募金の募集を開始いたしました。つきましては、募金にご協力いただきますよう、下記の通りお願い申し上げます。

合掌

記

1. 募金の名称 浄土真宗本願寺派 たすけあい運動募金  
「ウクライナ緊急支援募金」

2. 受付口座番号

〈郵便振替〉 〇１０００－４－６９９５７  
加入者名 たすけあい募金

〈銀行振込〉 銀行 ゆうちょ銀行  
店名 一〇九（イチゼロキュウ）店  
番号 当座 〇〇６９９５７  
名義 たすけあい募金

※通信欄に「ウクライナ緊急支援」とご記入ください。

## 編集後記（愚案）

「天声人語」（2022年10月5日朝日新聞）に、次のようなことが記載されていました。●両親から祖父母、さらにその先へ。ルーツをたどるとどこへ行き着くのか。自分はいったい何物かという問いは、人類にとって永遠のテーマだろう。●旧約聖書のアダムとイヴは答えの一つだが、現代は宗教にかわって遺伝学が真相にせまる。●今回、ノーベル医学生理学賞に決まったベーボ教授は、DNAを分析し、我々の祖先が生物学的に交わっていたことを明らかにした。欧米やアジアの現代人が持つているDNAの一部は、ネアンデルタール人から受け継いだものなのだという。●「我々の中には、ネアンデルタール人が『いる』」。かつてのベーボ教授の言葉だ。人類の壮大な旅路の痕がちっぽけな自分にも刻まれているとは、じつにロマンをかきたてられるではないか。●世界では人種の違いを理由にした差別や排除が、いまだにびこる。しかし現代の遺伝学が教えているのは、人種という分類がいかに空しいかということだろう。私たちは皆、長い歴史上のどこかで交わり、つながっている。

『歎異抄』第五条の「一切の有情はみなもって世々生々の父母兄弟なり。いづれもいづれも、この順次生に仏に成りてたすけ候ふべきなり」が浮かんできます。「遺伝子」分析は、生き方に役立つかもしれませんが、「仏さま」には成らせてくれません。